

教 仁 名 聞

第 97 号
(発行日)

2018 年 10 月 1 日

発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 6638113 西宮市
甲子園口 2 丁目 7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月 22 日 午後 2 時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月 2 日と 12 日 午後 3 時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月 6 日 午後 7 時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月 18 日 午後 6 時 30 分始。

* 8 月は 2 日の念仏座談会と 6 日の聖典学習会以外は休み。

苦の中に生きる意欲

今年の六月の調査で、全国

の二十〜七十九歳の男女一万四一〇〇人に「長生きについて」調査を実施。その結果、「長生き志向について、「あまりしたくない」(二八・九%)を含め、「長生きしたくない」と答えたのは全体の四一・二%でした。

世代別では六〇〜七〇代(三八・〇%)が最も少なく、五〇代が四七・七%で最多でした。二〇一七年の平均寿命は男性が八一・九歳、女性が八七・二六歳ですが、「何歳まで生きたいか」との問いに、二〇代の男性は七八・一歳、女性は七六・九歳と答え、世代別でも最も低かった。平均寿命を上回ったのは六〇〜七〇代の男性だけでした。

どうやらそれほど長生きをしたくない人が多いのですが、実際には平均寿命は八〇才をこえているのですから、長生きはしたくないと言っている

も、実際に長生きをしようと、

それを途中で止めるわけにはいかないでしょう。身体的に弱って苦痛がいろいろあっても、死ぬのは避けつつ寿命が尽きるまで生きる人がほとんどだと思えます。

評論家で著名な西部進氏(元東大教授)は今年の一月に入水自殺(七十八才)をしましたが、その意図は「将来身体

がもつと老化して、介護でやっとならざるを得ない」ということではないか。ただそうは思っていない。これは西部氏だけではなく、案外私たちの中にもある思いではないでしょうか。ただそうは思っていない。西部氏のような思い切った行動に出るにはものすごいエネルギーがいるし、また周りの人たちを悲しませるので、(まあなんとかなるだろう)「仕方がない」ぐらいで生きてゆき、西部氏のような行動を取る人はまれでしょう。

仏教ではよく「生きれる縁があればできるだけ生き生きり、縁がなくなれば死なしていた

ただ自死は望ましくないとい

われています。老衰して生きるのは確かに楽ではありませんし、老化して苦しい中でイヤイヤ生きるのも辛いですね。死にたいけど自分では死ねないので仕方なく生きているというのかもしれませんが、ありません。

ところで日本は自殺者の多い国で二万人以上の人が毎年亡くなっています。なぜ自死するのかわからないのは調査されていて、健康問題が一番多く経済問題そして家庭問題と続いています。病苦や経済苦そして人間関係での苦なのですね。現在は楽しい生活をしていても病気に罹ると一返に苦しみに転じますし、倒産とかりストライクにあうと生活は困窮してきますから、現在は楽しいと思っても縁がくればいつ困窮した境遇に転落するかわかりません。

自分の思い通りにならないことが続くと苦しみに耐えられなくなると死を選ぶのでし

よう。「安楽な生活」「楽しい人生」をこそ求めているのに苦しい日々が重なる、どうでしょう。こんな苦しい目をしてまでどうして生きていかねばならないのか」という思いが湧いてくるのがある意味では自然です。それでも死ぬのはもつと辛いので仕方ないから生きておろうということになるのではないのでしょうか。

たしかに病気とか経済的困窮とか人間関係の不如意とかが自死の直接の原因でしょうが、もう一つその奥に、こうした苦しみや不自由にもかかわらず「なお生きていこう」「耐えていこう」とする意欲や力が弱っているともいえると思います。

長生きして身体も弱りあちこちが故障して苦しいことが多いけれども、なお生きようとするのがやはり人間としてあるべき自然な姿だと思えます。その場合苦しくても生ききろうとする意欲や力が必要でしょう。

ではなぜ苦しみに耐えてもでも生きようとする意欲が衰退するかというと、「苦しんでも人生は生きるに価する」というものが見いだせないとい

うことがあるのではないでしようか。いわば人生そのものが空虚になっっているのです。毎日が何かむなしくて気が湧かないということがあろうと思います。

『健康第一は間違っている』
(名郷直樹著) という本の中に

「健康でも健康でなくてもかまわない

人間は、健康を失うようにできているから

長寿でも短命でも かまわない

人は 死ぬようにできているから」

とありました。このように諦観できるなら、それは結構ですが、それでもこれではなお生きる意欲は湧かないと思います。

やはり「苦しいことが多くても、それでも人生は生きるに値するものだ」という人生観なり意欲なりが大切だと思います。

ではどこからそれを得ることができのでしょうか。結論から申しますと、それは大慈大悲の量りないのちにであうことによつて、と宗祖か

ら教えられます。

あたたかい大いなる慈悲のお心の伴っているいのちが、私たちと共にすでにましますということに気がつくことは非常に大切なことです。大悲のお心に包まれ、それによつて生きることによつて、苦しんでもそれに耐えて生きることができるとはではないでしようか。

大慈大悲のいのちは南無阿彌陀仏という言葉でもって私たちにその存在を知らせて下さり、私たちをありのままに受け入れて下さっていることを聞かされ知らされるのです。南無阿彌陀仏のお念仏によつて阿彌陀仏とであわさせていただくのです。阿彌陀仏と共に生きる。阿彌陀仏に支えられ励まされ慰められながら生きる、またその阿彌陀仏のお徳を人と共に喜びながら生きるのです。

こうして与えられる量りなきいのちによる功德は人生のさまざまな苦しみに耐える力となつて下さるのであります。

最後に、ただ余りにも強い肉体的苦痛が続く場合には、死を選ぶ可能性がありえます。

(了)

七宝講堂道場樹

(和讃問答)

阿彌陀仏のこのかたは

いまに十劫とときたれど

塵点久遠劫よりも

ひさしき仏とみえたまう

(浄土和讃)

(現代語訳) 大経には、阿彌陀如来が五劫思惟し、兆載永劫のご修行によつて成仏されてより、今までに十劫という時が経っていると説かれていた。しかし、阿彌陀仏にであつてみると、阿彌陀仏は実はそれよりずっと以前、久遠劫の昔よりも前からの仏のように感じられる。

(語句) 塵点久遠劫——宗祖は「一大三千世界を墨にして、この墨を筆の先にちとつけて、国一つにちとつけ、国一つにちとつけて、つけつくして(それら国をみなつぶして塵にして)」と注をつけられています。広大な世界を塵にして墨にし、筆の先で国一つに点をつけていく、その数

をかぞえて、その数の劫ほどの長い時間を塵点久遠劫といふといわれる。

* * *

N 「このご和讃に似た和讃がありますね」

D 「ええ、

阿彌陀仏のこのかたは

いまに十劫をへたまえり

法身の光輪きわもなく

世の盲冥をてらすなり

ですね」

N 「阿彌陀仏のこのかたは

今に十劫をへたまえり、とは」

D 「このことは無量寿経に釈尊が説いて下さっているのです。それは「昔、ある王様が

世自在王仏の説法を聞いて、自分も世自在王仏のような仏

になりたいと願ひ、法蔵菩薩

となつて真理を求め修行に

入られました。そして法蔵菩薩

は自分だけが仏になるので

はなく、一切衆生を仏にした

い、それによつて自分も仏に

なりたいという広大な願ひを

起こし、それをどうしたら実

現できるかを考え、そして四

十八通りの誓いを建ててこれ

を成就するために長い間修行し、一切衆生を仏にすることの出来る功德を成就して、これを衆生に与えることによつて一切衆生は成仏できると見定められて、法蔵菩薩は阿彌陀仏になられた。それから現在まで十劫という時間を経ておられる」といふ説法です」

N 「十劫の昔に四十八の本願を成就して仏になられた、その仏が阿彌陀如来様ですね」

D 「ええそうです」

N 「ところが今回の和讃では、

この阿彌陀如来様は無量寿経

では、ある時法蔵菩薩として

発願し修行して仏となられた

というように、始まりがある

ように説かれているけれども、

久遠劫という始めも終わりも

無いほどの永遠の仏様のように

感じられる、との思召し召し

なのでですね」

D 「ええそうです」

N 「それはどうしてですか」

D 「これは仏身には大きく分

けて法性法身と方便法身とが

あつて、法性法身とは色も形

もない真実の働きそのもの、

いわば量り無きいのちであり

量りなき光であるような無量

の功德そのものをいい、方便

法身とはこの法性法身が衆生

法身とはこの法性法身が衆生

を救うために形を表し名を示して衆生に救いの働きとして現れて下さる仏のことをいいます」

N 「そうすると法蔵菩薩となつてお出まし下さって私たちを救いたもう阿弥陀如来様は方便法身なのですね」

D 「ええそうです。ですから阿弥陀如来様は法性法身から現れて衆生を救済せんがために願を起し修行して救済佛となられた私たちの救い主としての方便法身の仏様です。阿弥陀佛になられて今に至るまで十劫という時を経ていると説かれているのです」

N 「この阿弥陀仏の元は法性法身の仏なのですね」

D 「ええそうです。阿弥陀仏の源である法性法身からいうと阿弥陀仏は無始無終の永遠の法身（仏）であるといわれるのです」

N 「それで宗祖は、阿弥陀仏は塵点久遠劫よりも長い永遠の仏のようにおもわれるといわれたのですね」

D 「そうだと伺います。もし法性法身という背景が無ければ、阿弥陀仏は始めがあればまた終があるという有限な仏と受け取られてしまいます」
N 「しばらくしたら、居られなくなつたというのでは困り

ますものね」

D 「ええ、ですから阿弥陀仏の本性は滅することのない無限の働きでありましょう」

N 「ではなぜ、法性法身の仏様だけではいけないのでしょうか」

D 「もし法性法身の色もなく形も名も無い働きでしたら、私たちには知れようがなく、私たちは仏様にであわないうまで、いつまでたつても迷いの世界に彷徨しなければならぬでしょう」

N 「法性法身のままでは、私たちに手がかりが無くなってしまうのですね」

D 「ええ、ですから法性法身はご自身を知らせ、ご自身の功德を私たちに与えんがために方便法身の阿弥陀仏、もう一つ言えば南無阿弥陀仏となつて私たちにご自身を現わして下さつたのです。無量の功德は大慈大悲の南無阿弥陀仏として私たちに喚びかけ、私たちの口に南無阿弥陀仏と現れ、ナムアミダブツと聞かせて下さるのです」

N 「法性法身の永遠の仏様はそれほど身近な救い主となり、ご自身を露わにして下さるのですね」

D 「そうです。ここに驚くべき慈悲があるのです。阿弥陀仏は私たちと一瞬も離れず、私たち一人一人の所に於て、今ここに、南無阿弥陀仏の名となり言葉となつて私たちに喚びかけづめであります」

N 「そうするとお念仏となつて口に称えられ耳にナムアミダブツと聞かせて下さることによって、愚かで真理などはないにも分ならず迷いに沈んでいる私たちも阿弥陀仏に遇うことができるのですね」

D 「ええそうです。方便法身の南無阿弥陀仏によつて法性法身の働きにふれることができるのですね」

N 「もし方便報身の南無阿弥陀仏様がなければ、私たちは真実にあうことは難しいのですね」

D 「南無阿弥陀仏という言葉を離れて（阿弥陀仏は量り無いいのちである）とか（かぎらないお慈悲である）とか（広大なさとの智慧である）とかいっても観念的には多少理解できても、実際的な出遇いは極めて難しいと思います」

（了）

お便り

K・T生

先生からお話を聞かせて頂くようになってから、2年半くらいのはずなのですが、南無不思議光如来のことを直接伺つたのは、昨日が初めてではないかと思ひます。

如来の無碍性（障碍不可）を示すときは無碍光如来、絶対性（不可思議）を示すときは、不可思議光如来と讃えておられると伺い、そのような違いがあるのかと思ひました。分別思議が到底及ばない。

なぜ南無阿弥陀佛を信受する一念に往生が決定するのか、全く分からない。しかし、諸佛善知識がお勧め下さる如来の仰せに従い、ただ念佛を聞く。

そのことが如来に帰命することに仕上げられていることは、驚嘆すべきことであり、全く理解できない不可思議なことでもあります。

また凡夫の悪業煩惱、身口意の三業も全く障りとせず、そのまま貫き至り届いて下さり、衆生に信心が發起せしめられ

るのは、全く無碍光のおはたらきの賜物でありましょう。全く障りにならない、如来のほうからいえば、問題にならないのであります。

よくぞここまで仕上げられた本願のお力だと思ひます。「わが名を称えるばかりで助ける」、「汝を往生させずば我佛に成らじ」とまで仰つて下さつた大悲、誠に有難く存じます。念佛して助かるのではなく、「二声称えるばかりで助ける」とまで仰つて下さる、その底知れぬ大悲に助けられて往生させて頂くのである、と聞かせて頂いております。

名となり、声となり、智慧の念佛、信心の智慧が師となつて導いて下さる、これが念佛往生の相なのではと思ひます。そうすると、やはり信前信後を問わず、念佛を聞く、聞名の一行をたもつ、「無量寿佛の御名をたもつ」という仰せは念佛を申しつつ、聞けよのお勧めであり、このお勧めによりかかるばかりであります。

（了）



信心夜話

東漸寺様が「略文類の初めに〔万行田備の嘉号は障りを消し疑を除く〕とある。これをどう頂きなさるか」と。

人々は聞きながら、念仏もせずに、疑い晴れよう疑い晴れようとしても、疑いの晴れる薬を飲まないから、何時までたっても「疑」晴れぬ。

〔松並松五郎念仏語録〕より
松並松五郎さんの言葉〕

* *

聞法者が一番困るのは、「本願を疑う心」が取れないことである。このこと一つに困るのである。この疑い心が問題にならない間は聞法と言っても未だ真剣に求めていないからである。真剣に聞くと必ずといっていいほど本願を信じる信心が頂けないとか疑いが晴れないとかに悩むのである。「真宗は本願を信じる一つで助かる、有難い教えである」と聞くと、必ず「どうしたら信じられるか」となり、「どうしても信じられない」という壁にぶつかるのである。
たしかに真宗は一切衆生を平等に助けたもう教えであり、

凡夫のまま、煩惱具足のまま、ありべのままに救われる教えである。ただ「そのままなりで助ける」という無条件のお助けを聞いて「ああ有難い、こんな者を」と「聞く」「聞き受ける」「信じる」か、それともそれを拒絶するか、受け入れられないか、そのこと一つが問われてくるのである。

もし、「受け入れることも信じることもいらない、万人をそのまま助けて下さるのでなければ絶対無条件のお助けにならない」などと言う人がいるが、それなら始めから救いなどと言う必要はない。もう皆すでに佛になつているのだから、人間もいないことになる。そんな話は要するに観念である。

如来法蔵様は、一切衆生を救いたいと発願し、修行し、願行成就して一切衆生を助ける法を仕上げた。それが南無阿弥陀仏である。この南無阿弥陀仏が仏になる因であつて、これを私たちに与えて下さる。ただ私たちは与えて下さる南無阿弥陀仏をハイと受け取るだけである。

にも関わらず、長い間、生まれ変わり死に変わりしても、この仏因である南無阿弥陀仏を拒み続けてきたのである。

ところが如来法蔵様は衆生には南無阿弥陀仏を受け入れる心（信心）も起こらないとまで知り抜いて下さつていたのである。私たちは煩惱ばかりで、お助けの法を信じない、それほどの底下の凡夫なのである。

そのことを知り抜いて下さつて、南無阿弥陀仏の中に南無阿弥陀仏を受け入れる心まで込めて私たちに与えて下さる。南無阿弥陀仏は私たちの「助からぬ姿」「疑いばかりで法を受け入れない闡提」であること、それを南無阿弥陀仏で知らせて下さる。

南無阿弥陀仏を称え聞くということは、「汝は助からぬ者、疑い晴れぬ者である。だからこそこの阿弥陀仏がまるまる引き受ける、そのまま称えるばかりで助ける」との仰せ、それが南無阿弥陀仏の仰せである。「助からぬ者」と知らして下さるのも南無阿弥陀仏なら、そんな者を「助ける」の仰せも南無阿弥陀仏である。まことに到り届いた大悲である。

このように私にかけて下さる大悲心は知らずして、煩惱の塊である我が心に浸透して遂に「ああこんな者をようこ

そようこそ」と、南無阿弥陀仏を聞き受ける信心となつて下さるのである。南無阿弥陀仏にこもつていられる大悲のお心が届いて私に信心となつて与えられるのである。

だから疑いを晴らしたもう信心は南無阿弥陀仏の大慈大悲のまことのほかにはない。この南無阿弥陀仏を称え聞くことによつて、大悲心は私に届いて信心となつて下さるのであるから、南無阿弥陀仏には疑いを除くお徳がこもつているのである。

このような南無阿弥陀仏を称えず聞かずにいるから、いつまでも疑いが晴れぬのである、との松並さんの仰せです。

（了）

住職雑感

九月四日、台風二十一号が襲いかかってきた。たいしたことは無いだろうとたかをくくっていたが、実際は近年に無い激しいもので、風の音をきいているだけでもこわかった。ほぼ一時間吹きまわられた。その間バリバリという大きな音が何度もしたので、これは只では済まないと思つて、風がおさまった後、家の周りを見渡すと、物干し台の塩化ビ

ニールの波板は全部剥がれていて、

その殆どは何処に飛んでいったのか、見当たらない。バリバリという音はこの音であつた。庭には近所から、はがれた大きなトタンが落ちていた。その後、三日間も停電し不自由極まりなしの状態。その間、行水とローソクの生活であつた。勿論、電話もテレビもラジオもダメで、なにもできないので、夜ローソクの光の前でじつと座っていると、おのずと自分の姿に目がゆく。ローソクの光は不思議で、己の人生全体が闇の中に浮かぶよう、人生全体が幻のように感じたのである。宗祖の時代はこういう光の中で生きられたのであるから、自己省察が深くなられたのだと思う。電気の明るすぎる光の中ではどうしても眼は外向きになつてしまう。

（了）

〈遠方法話予定〉

- 十月四日。名古屋。高畑聞法会館。午前十時より法話・座談
 - 十月七日。福井市照手町。安居寺法話。午前・午後
 - 十一月七日。名古屋。「名鉄・前後駅下車すぐ」西雲寺。午前十一時より法話・座談
 - 十二月十五日（夜）から十六日（午後）。姫路市。西源寺。
- （詳しくは念佛寺にお尋ね下さい）